

黒・赤・金—ドイツ三色成立史考

杉浦忠夫

1

黒・赤・金のドイツ三色 (Schwarz-Rot-Gold. Der deutsche Dreifarbb/Die deutsche Trikolore) が、ドイツのナショナルカラー (Deutsche Nationalfarben) として、正式にドイツ国旗に制定されたのは比較的新しい。今から83年前のヴァイマル憲法の公布 (1919年8月) をもってであり、ここに第二帝政の黒・白・赤に代って黒・赤・金がドイツ国旗として登場した。

黒・赤・金旗が初めて公的に掲げられたのは、ヴァイマル憲法より71年前の1848年3月、パウロ教会で開かれたフランクフルト国民議会 (正式には「ドイツ憲法制定国民議会」) に先立つ予備議会の開幕と同時であった。このとき議長席の上に高々と巨大な黒・赤・金旗が掲げられた。そして同年11月の連邦法で、ドイツ連邦を構成するすべての邦国 (35領邦と4自由市) に黒・赤・金の三色旗を用いることが定められた。ところが翌1849年6月に突如として議会が解散されるに及んで、フランクフルト憲法 (1849年3月成立) とともに、黒・赤・金旗の国旗制定もあえなく流産してしまった。

1848年のフランクフルト国民議会で黒・赤・金旗の公的使用が認められる前に、黒・赤・金旗が公然と用いられた例は挙げるに難しくない。1817年10月17/18日のヴァルトブルク祭で、準ドイツ三色旗ともいべきブルシェンシャフト旗 (金糸の房飾に囲まれて赤・黒・赤二色の黒地の中央に斜めに金色の樅の葉を刺繍した旗) が、ヴァルトブルクに向う行列の先頭の旗手

に奉持され、開会二日間終始掲揚された。次いで1832年5月27日のハンバッハ祭の大規模な大衆デモ（三万人以上が参加したといわれる）で、ハンバッハ城の塔頂に翻る黒・赤・金とデモ行進する市民・学生の打ち振る多数の黒・赤・金が、当時の彩色木（銅）版画からしてもはっきりと見てとれる。1832年のハンバッハ祭で用いられた黒・赤・金は、明らかに現在のそれと全く同じ三色旗（横縞三等分）であった。

1848年のドイツ三月革命では、3月18/19日のベルリンの中心部での労働者・学生・革命家対プロイセン軍の壮絶な市街戦で、市民の側に黒・赤・金が翻翻と翻った。3月21日には、騎馬の先導者が掲げる黒・赤・金旗を先頭に、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世が騎馬隊を率いて、ベルリン市中を巡幸した。つねに黒・白のプロイセン旗をともにするこの「玉座のロマンティカー」が自ら黒・赤・金の腕章を巻き、革命の色ともいわれた黒・赤・金旗を先立たせざるをえなくなったとき、国王の胸中いかに複雑であったろうか。それはそうと、1815年6月12日のイェーナ・ブルシェンシャフトの結成時の金房飾りの赤・黒旗に始まり、1817年10月のヴァルトブルク祭での金房飾りと赤・黒・赤と中央の金の刺繍の榎の葉のブルシェンシャフト旗と1832年5月の大衆デモを経て、1848年3月革命に至ってやっと黒・赤・金の三色旗が自由と統一を求めるドイツ国民のシンボルカラーであることが認知されたのである。だがフランクフルト憲法の成立（1949年3月23日）の3か月後に廃棄され、黒・赤・金の国旗化はあえなくついでにしまった。1867年7月の北ドイツ憲法と1871年4月のビスマルク憲法のもとで、黒・赤・金は黒・白・赤の蔭に隠れてしまった。

黒・赤・金旗が復活して国旗として登場したのは、既述のようにヴァイマル共和国の成立をもってであった。ヴァイマル憲法第三条は、「国の色（Reichsfarben）は、黒・赤・金である」と定めた。ところが黒・白・赤に郷愁を懐く一部守旧派への配慮の結果、上記条文に続けて、「商船旗は黒・白・赤とし、その上部の左隅に国旗〔黒・赤・金〕を配する」という条文を

付け加えた。このことによってのちに延々と続く厄介な「国旗紛争」Flaggenstreitを引き起こす禍根を、エーリヒ・アイクに言わせれば「憲法条件の政治的結果がしばしば客観的な意義以上に大きなものとなった一個所」を作ることになった。ヴァイマル憲法によって黒・赤・金が国旗として保障されたとはいえ、妥協の産物としての出発であったがために、黒・赤・金の前途はけして安泰ではなかった。

1933年3月のナチ党NSDAPによる政権掌握によって、1945年の敗戦に至るまで、黒・赤・金はあっさり放棄させられた。代って第二帝政時代の黒・白・赤が復活し、1935年9月からは、あの悪名高い鉤十字(Hakenkreuz)が国旗に付け加えられた。1848年革命は挫折したし、ヴァイマル共和制も失敗した。黒・赤・金の国旗としての安定的持続を求めるには、第二次大戦の敗戦を待たねばならなかった。

2

第二次大戦終決直後の英・米・仏・露連合軍による占領体制のもとでは、被占領国ドイツは国旗を掲げるべくもなかった。1949年に至って、英米仏三国管理地域がドイツ連邦共和国(BRD)として、またソ連軍占領地域がドイツ民主共和国(DDR)として、それぞれ主権国家となった。その際二つのドイツ国家は、国旗の制定に関しては異議なく共通して黒・赤・金を選んだ。東西両ドイツとも、政治体制は異なるとはいえ、黒・赤・金の歴史的・象徴的意義を全面的に認めたいうで、黒・赤・金の三色を国旗として維持しようとしたからにはほかならないからだろう。歴史的回顧に基づくこの希望と決意がどれほど強いものであったかは、西ドイツ基本法の成立過程の論議から容易に汲み取ることができる。

敗戦から3年半後の1948年9月1日に、基本法の制定機関となる「議会評議会」(Parlamentarischer Rat)が、ボンで初会合を開いた。ここで評議

会は CDU 議員でのちに連邦首相となるアデナウアー (Adenauer, Konrad) を議長 (Präsident) に, SPD 議員カルロ・シュミート (Schmid, Carlo) を中央委員会委員長に選んで, 基本法の作成に着手した。個々の条文作成には, 連合軍当局とのあいだに「勸告」をめぐる悶着があったが, 国旗規定に関しては障害なく進んだ。基本法第22条〔連邦国旗〕の条文「連邦国旗 Bundesflagge は黒・赤・金である」と, まことに簡潔そのもので, 但し書きも付け足しもなかった。

さてボン基本法制定の第三読会で, 評議員の大多数がカルロ・シュミートの提案する第22条に賛成した。この際の討議記録は, 黒・赤・金を国旗とすべしとの熱気をわれわれに思い知らせてくれる。一時代の記録として再録してもよいだろう。

Dr. アデナウアー (CDU): 「さて第二読会で保留になった国旗問題に関する第22条に移ります。ここに Dr. シュミート動議が回ってきています。プリント887です。これによると第22条は以下ようになります。すなわち, 「連邦旗は黒・赤・金である」。(ベルクシュトレッサー教授発言)

Dr. ベルクシュトレッサー (SPD): 皆さん, わたくしたちの動議の意味はまことに明白です。わたくしたちはドイツ連邦共和国がヴァイマルで法的に制定された国旗を掲げることを望みます。100年前にはじめてフランクフルト議会によって立法化したと同じあの国旗, 今日この会場に掲げられているのと同じあの国旗のことです。この国旗がかつての姿と同じ形で, 少しも変らぬ形でドイツ連邦の国旗となることをわたくしたちは望みます。

黒・赤・金の伝統は統一と自由 (Einheit und Freiheit) です。いやむしろこう言った方がいいでしょう, 自由のなかの統一 (Einheit in Freiheit) であると。この旗は自由の理念, つまり個人的な自由の理念というものが, わたしたちの将来の国家の基礎のひとつであるべきだということを示

すシンボルであることをわたくしたちは認めねばなりません。それゆえわたくしたちはこの旗を欲します。わたくしたちはこの旗を変わることなく欲します。この提案をご承認下さい」

Dr. アデナウアー：「シュミート提案の票決に移ります。シュミート提案に賛成のかたはご起立ください。賛成49票です。同提案に反対のかたご起立ください。提案は賛成49票，反対1票で承認されました。（盛大な拍手）

もはやここには黒・白・赤の旧帝国旗に対する郷愁めいた感傷は微塵もない。ヴァイマル時代の苦々しい国旗紛争を惹起した曖昧な規定を思わせるものは何もない。ひたすら黒・赤・金旗を自由と統一を求めて戦ったドイツ国民のシンボルとして奉持しようとする熱意を読み取ることができるだろう。

既述のように、東ドイツも国旗規定に関しては黒・赤・金を基調とした。しかし「ドイツ民主共和国憲法」（1949年10月7日/1968年4月6日）の第一条〔ドイツ民主共和国の性格〕は、マルクス・レーニン主義の指導のもとでの社会主義国家であることを宣言したうえで、国旗をこう規定した。「ドイツ民主共和国の国旗は黒・赤・金の色から成り、両側の中央にドイツ民主共和国の国章を帶有する。ドイツ民主共和国の国章は鎚とコンパスから成り、下部に黒・赤・金の帯が巻きつけられた稲の環で囲まれている」と。

だが農民と労働者の社会主義国家であることを建て前として、国旗の真中に付けられた鎚とコンパスと稲穂の国章をつけた国旗は、どんな運命をたどったのだろうか。1953年6月17日の全国的な労働者蜂起のデモ行進でも、1981年の西ドイツ首相コール（Kohl, Helmut）のドレスデン訪問の際の市民の歓迎デモでも、東西両ドイツの再統一実現間近の東独市民のデモ行進でも、東独人民はすべて——当時の報道写真が示すように——中央に鎚とコンパスと稲穂の国章のない黒・赤・金旗（一体どこに隠し持っていたのだろうか）を打ち振ったのである。1990年10月3日のドイツ再統一の記念日に、

旧東ベルリンのある高層ビルの窓辺に、中央のまん丸の国章がすっぽり切り取られた黒・赤・金旗が掲げられている写真があった。それはまことに印象深い光景であった。それは、憲法の国旗規定は簡潔であるに如くはないことを教える一光景であった。

3

ドイツのナショナルカラーとしての黒・赤・金の起源を尋ねる論議は、現在ではほとんど一致して解放戦争時代（1813-15）のリュツォー義勇軍（Lützower Freikorps）の制服の色と、リュツォー義勇軍の志願兵として参戦したイエーナ大学の学生が1815年6月に結成した最初の学生の政治団体イエーナ・ブルシェンシャフト（Jenaer Burschenschaft）の旗印、およびその制服の色に求められる。いずれにしても、1806年のイエーナの屈辱的な大敗と神聖ローマ帝国の崩壊以降、ナポレオン軍の占領下で燃え上がったドイツの国民的高揚期、それも特に解放戦争を挟む数年間に限定される。黒・赤・金の由来を中世の神聖ローマ帝国に、とりわけ皇帝ハインリヒ四世の紋章（金地に赤い舌と鉤づめをもつ単頭の黒鷲）や、金地に黒鷲のフリードリヒ二世の軍旗（Standarte—長三角形で末端が二又に分かれている）に求めることはもはやない。1806年のドイツ国民のための神聖ローマ帝国の崩壊まで、現在の意味でのナショナルカラーといえるものが全然なかったからである（黄色と黒の郵便マークに中世皇帝色の名残りを見る説もあるが、今はこれについては言及しない）。

比較的最近の論調からしても、例えば1985年6月14日の„Die Welt“紙は、イエーナ・ブルシェンシャフト創設170周年記念を機に、「リュツォー義勇軍の黒い上衣と赤い縁飾りと金ボタンが、イエーナ・ブルシェンシャフトの黒・赤・金旗の範例を与えた」と書いた。ドイツ・ブルシェンシャフト（DB）の機関誌である„Burschenschaftliche Blätter“の1982年第3号に掲

載された論説（「君主たちは国外に失せろ，ドイツ・ブルシェンシャフトと1832年のハンバッハ祭」）で，ハンス・シュレーターはこう書く。「1815年のイエーナ・ウーア・ブルシェンシャフトのエンブレムはリュツォー狙撃兵の制服の色に由来する」と。

1984年5月のハノーファーでの紋章学の研究発表会で，ハリー・D・シュアデルはドイツのナショナルカラーの成立についてこう論じた。「黒・赤・金の色はリュツォー狙撃兵の制服の色に由来する」と。これに続いて次のように述べる。「1815年6月12日に学生の一団である『イエーナ・ブルシェンシャフト』が結成されたとき，ブルシェンシャフターたちは黒い上衣と赤いピロードの折返しから成り，飾りに金の樅の葉をつけた『礼服』（かれら自身は『軍服 Waffenrock』と呼んでいた）を採用した。この「礼服 Feierkleid」の配色はリュツォー義勇軍の色への回想から選ばれたのである。というのは，このブルシェンシャフトの多くの団員は，この陸軍部隊の隊員であったからである」。

1989年に「イエーナ・ウーア・ブルシェンシャフトの色からドイツの色へ——黒・赤・金の成立初期の歴史に関する一寄与」という長大な論文のなかで，筆者のカウプ（Kaupp, Peter）は，上述のシュアデルの所説を一段と進めて詳説した。その際かれはボン基本法第22条に関する註解（Kommentar zum Bonner Grundgesetz, 1982）や，ハッテンハウアー（Hattenhauer, H.: Dt. Nationalsymbole, 1984）やフリーデル（Friedel, A.: Dt. Staatsymbole, 1968），更には法制史家フーバー（Huber, E. R.: Dt. Verfassungsgeschichte seit 1789, Bd. 1, 1967），その他ブロックハウスやマイヤーの百科辞典をも総動員して援用しながら，黒・赤・金ドイツ三色の起源を解放戦争時のリュツォー義勇軍の軍服の色と，義勇軍に参加した学生たちによって結成されたイエーナ・ブルシェンシャフトの礼服と旗印に求めることの正しさを力説した。イエーナ・ブルシェンシャフトを結成した学生の幹部11名のうち8名がリュツォー義勇軍の元兵士であったことを特筆しながら

ら、カウプ氏は、若干の近代史研究の著述が黒・赤・金を「幻想的な中世の色」から導き出すことにとどめを刺し、黒・赤・金の起源はリュツォー義勇軍の黒・赤・金の制服に基づくことを確証した。

リュツォー義勇軍の制服の色がイエーナ・ブルシェンシャフト、言うなればウーア・ブルシェンシャフト（19世紀なかば以降に、他種の学生諸団体と同じく体制内化し、その発足時の政治的活力を喪失して社交クラブか決闘クラブに変質した近代および現代のドイツ・ブルシェンシャフトと峻別するために、あえてイエーナ・ブルシェンシャフトを „Urburschenschaft“ と呼ぶ¹⁾の旗印と礼装の色に反映し、のちに自由と統一を求めるナショナル・シンボルカラーに昇華して、やがて国旗として定着したと説くのは、明らかにブルシェンシャフトを支持する立場に立っての考え方である。だが数ある学生団体 (Studentenverbindungen/-korporationen) のなかで、ブルシェンシャフトと双壁をなすコア系の学生団体 (KSCV = Köseener Senioren-Convents-Verband) の立場に立つ論者は、ブルシェンシャフト側の黒・赤・金見解に組することは当然ながらできない²⁾。かれらはブルシェンシャフトの黒・赤・金がナショナルカラーにまで昇華した起源を、リュツォー義勇軍に求めるよりは、ユーア系学生団体の原型であるランツマンシャフト (同郷人会) に属するある団体の礼服と旗印の色が、ウーア・ブルシェンシャフトの結成時にブルシェンシャフト側にそっくり引き継がれたのだという風に論点を変える (その意味からすると、前記カウプの論文がコア系学生団体の機関誌 „Einst und Jetzt. Jahrbuch des Vereins für Corpsstudentische Geschichtsforschung“ (34/1989) に掲載されたことは驚きの至りというほかはない)。

こうしたコア系学生団体の最大の代表者は、何といてもファブリチウス (Fabricius, Wilhelm) だが、現在その系統の論者を求めれば、カーター (Kater, Herbert) の二論文であろう。

カーターは先ず紋章学専門誌 „Kleeblatt. Zeitschrift für Heraldik und ver-

wandte Wissenschaften“ (2/1986) で、リュツォー義勇軍からの借用は認めはするものの、ファブリチウスを援用しながら「黒・赤・金はメクレンブルクの領邦等族の制服とイエーナの学生団体のひとつランツマンシャフト・ヴァンダリアの旗印に基づく」と強調する。更に『学生史事典』の主幹パシュケ (Paschke, Robert; Corps Bavaria のOB [Alter Herr=A. H.]) はドイツ三色がリュツォー軍の制服に起源するという説明を「romantisch で歴史的に証明できない」と論ずる。パシュケはトライチュケの『19世紀ドイツ史』を援用して、「黒・赤・金はウーア・ブルシェンシャフトの結成に決定的な役割を果たしたコア・ヴァンダリア (Corps Vandalia) のパレード用制服にさかのぼる」として、結論的に「ウーア・ブルシェンシャフトの色は、イエーナのコア・ヴァンダリアから誕生した。黒・赤・金の色は紋章学の意味で非紋章学的 (unheraldisch) である」と述べる。

4

黒・赤・金の起源をめぐる本家争いにも似たこの種の我田引水的な——トライチュケ引用に見られる——論調は、19世紀以来のブルシェンシャフト系学生団体とコア系学生団体との積年の対立抗争の歴史の反映であると知れば、後者にも理ありとはいえ、軍配はおのずから前者の論調に傾斜せざるをえまい。いずれにしても、準三色旗とも三色旗の原型ともいべき赤・黒・赤と金の縁飾りから成るイエーナ・ブルシェンシャフト旗が、1817年のヴァルトブルク祭で一般市民の前に現われない限りは、この旗の色が国民の意識形成に何の政治的効果も与えなかっただろうと考えると、ドイツ三色の出所由来を一方から他方への制服や旗印の色の模倣だの引き継ぎだのという元祖争いめいた論議から導き出すことが、いかに生産性のない議論であるか、驚くほかはない。

われわれはその思想と行動において、ウーア・ブルシェンシャフトの面

が、よってもって紋所とした黒・赤・金でもって何を表現しようとしたのかに、焦点を据えるべきであろう³⁾。それにはまず、イエーナ・ブルシェンシャフトの成立に積極的に関わった学生たちの共通体験の場であるリュツォー義勇軍の成立事情なり性格なりを検討し、黒・赤・金の制服に身を包んだかれらの共通の従軍体験が、どのようにしてやがてナショナルカラーとして結晶するに至ったのかが、問われねばなるまい。その際、われわれはイエーナ・ブルシェンシャフトの成立以前からブルシェンシャフト組織普及の構想を公表し、やがてそれをドイツの全大学で実現させるべく、リュツォー義勇軍の一指揮官として、従軍学徒兵の思想形成に大きな影響を与えた一人の人物に着目しないわけにはいかない。「体操の父 (Turnvater)」と呼ばれ、晩年にフランクフルト国民議会議員となった名うてのナショナリストでアジテーターのヤーン (Jahn, Friedrich Ludwig, 1778-1852) がその人である。

毀誉褒貶に富むこの人物は、イエーナ・ブルシェンシャフトの成立前から1817年のヴァルトブルク祭に至るまで、終始陰に陽にイエーナ・ブルシェンシャフトの形成過程に関与した。後世のあるヤーン研究家はヤーンをブルシェンシャフト運動の「精神的養父」と呼びさえた。実際、ヤーンを抜きにしてはブルシェンシャフトの誕生も、プロイセンのリュツォー義勇軍の編成も、従ってまた黒・赤・金の普及浸透も考えられないほどに、この人物は稀代の演説家であり、アジテーターであり、オルガナイザーであり、その信念と抜群の行動力は圧倒的な影響力をもっていた。

1849年1月15日、晩年のヤーンはフランクフルト国民議会の有名な「皇帝演説」(世襲による帝制と小ドイツ的解決の支持演説で大喝采を博したことからこの名がついた)で、自ら体操クラブとブルシェンシャフトの創始者であったことを認めたうえでこう語った。「わたしはブルシェンシャフトの名誉会員であったことはけしてない。わたしはそういうことから遠ざかっていたのだ。指導者として若者たちの行動を制約させないため、あるいはかれらの上に最高指導者を置かないためにだった」と。

実に巧妙な演説というべきであった。ヤーンはこの演説で、初代議長のカークゲルン（Gagern, Heinrich von）をはじめ、全議員586名のうち三人に一人が元ブルシェンシャフターであった議員たちに、自分がブルシェンシャフトの（直接的なのか間接的なのかの区別はほかしたまま）まぎれもない創始者であることを自認するとともに、32年前のヴァルトブルク祭に際して偉大な先導者としての招待を受けながらなぜ出席しなかったかという積年の疑問に実に巧妙な答を与えたからだ。この発言の少し前の個所で、ヤーンは三色旗について言及して、「わたしの紋章つきの盾は黒・赤・金三色を帯びている。そしてそこには名誉・自由・祖国〔という三語〕が記入されている」と語った。

この晩年の議場での回想的告白のわずかな抜粋によっても、ヤーンがフィヒテの愛国的演説から1848年3月革命に至る「組織されたナショナリズム」（デュエディング）の推移過程への関わり合いや、またその間の黒・赤・金への対処の仕方がどうであったかが当然問われねばなるまい。そういう意味でヤーンというこの人物は、ナショナリズム高揚期からフランクフルト国民議会に至る間の黒・赤・金の歴史的な発展過程を解き明かしてくれる、いわば *Schlüsselfigur*（キーパーソン）とあってよからう。

5

ブルシェンシャフト史研究の古典と言すべきパウル・ヴェンツケ『ドイツ・ブルシェンシャフトの歴史・第一巻—準備期と初期からカールスバートの決議まで—』（1919/1965）は、「ブルシェンシャフト」を名乗る学生組織の設立構想を初めて公表した文書として、ヤーンが1811年に同じ体操家仲間のフリーゼン（Friesen, Karl Friedrich, 1785-1814）とともに書いた小冊子「ドイツ・ブルシェンシャフトの組織と設立」（„Ordnung und Einrichtung der deutschen Burschenschaft“）を挙げる。このパンフレットは、

同年10月19日のフィヒテのベルリン大学学長就任講演「大学の自由を妨害すると思われる唯一の要因」が説く学生風俗批判に呼応してヤーンが新しい学生組織の設置構想を展開したものであり、また1810年ベルリンに設置された愛国主義団体「ドイツ同盟 (Der Deutsche Bund)」の依頼に応じて書かれた憂国警世の文でもあった。

周知のようにフィヒテは、1794年にイエーナ大学に就任して以来、エランゲン大学を経て新設早々のベルリン大学の教授・学長に至るまで、結社的な学生団体 (Korporationen/Verbindungen) に属する学生たちの決闘、飲酒、乱暴狼藉、放歌高吟などの蛮風謳歌の悪弊を大学における学問的営為の不倶戴天の敵として排撃し続けてきた。その種の学生たちから手酷い屈辱的な反撃を何度か蒙りながらも、学生批判を止めなかったのは、学問の自由と大学の自治をあくまで守ろうとするフィヒテの理想主義的的大学観——これが新構想のベルリン大学の設立趣旨だった——に基づくものであった。学長就任講演は正しくそうした学生風俗の根絶を求めることにあったが、その根底には講演「ドイツ国民に告ぐ」(1807/08) で展開してみせた民族の独立の確保と人類の全面的な改造という大きな国民教育的な (nationalpädagogisch) 理念があった。

同じことはヤーンについても言える。ヤーンはゲッティンゲン、グライフスヴァルト、ハレ、イエーナの大学に学んだが、その間かれは決闘クラブ的な学生団体の蛮風に徹底抗戦を重ねた。それとともにヤーンはランツマンシャフト＝コア系学生団体の狭量な領邦国家的な愛郷心 (Patriotismus) とオルデン (フリーメイソン系の学生団体) のコスモポリタンの傾向を排撃した。そして祖国ドイツの統一と自由を求めるナショナリズム的思想で結ばれた統一的な学生団体 (Burschenverbindung あるいは Burschenschaft) を一大学に一つ設置し、これを全国的規模に拡大しようと努めた。その結論表明が、前述した1811年の「ドイツ・ブルシェンシャフトの組織と設立」であった。このブルシェンシャフト設立構想と同じ年に、ヤーンはベルリン近郊

のハーゼンハイデに体操場 (Turnplatz) を開設した。その基本構想は「青年を無気力でだらしない状態から守り、将来の祖国のための戦争に備えさせる」ことにあった。最終目標はナポレオン軍に対する勝利によってドイツの自由と統一をかちとることであった。体操場による訓練もブルシェンシャフト設立意図も、来るべき対仏戦線の勝利を青年学生に期待するヤーンの意図の表現だった。

前述のヴェンツケは、1811年12月に公表したヤーン/フリーゼンのパンフレットをもって、ヤーンのブルシェンシャフト設立計画の最初の記録とみなしたが、しかし他方、最近のある研究論文は、ヤーンは上述した冊子を発表するよりもすでに13年も前に、それもイエーナでドイツの学生生活の基本的な礼儀作法と原則と、あるべき学生像としての „Burschenschaft“ を論文に書き留めていたことを教えてくれる。ハーゲン (Hagen, Hans Heinrich) というその論文の執筆者 (かれはヤーンを「ドイツ・ブルシェンシャフトの本来の創設者」と断ずる) は、この事実はベルリン大学生で体操家でヤーンの秘蔵っ子であったマースマン (Maßmann, Hans Ferdinand, 政治的叙情詩人でゲルマニスト、詩人ハイネとベルリン大学教授職を争ったことで知られる) の1816年の報告に従ったとして語る。なるほどマースマンは1816年に、学友で体操仲間のデュレ (Dürre, Eduard) とともにヤーンの指令で、発足間もないイエーナ・ブルシェンシャフトの足腰を強化し、同地に体操場を開設し、そして来るべきヴァルトブルクでの祝典の準備作業をするために派遣され、両者とも学籍をイエーナに移した。その際、マースマンはかれの師匠ヤーンの論文がイエーナにあることを知り、早速読んだにちがいない。ハーゲンはそれをもとにこう書く。「この論文はドイツ・ブルシェンシャフトの発展のための本質的な準備作業であった。それゆえ1798年には、ヤーンは全国ブルシェンシャフトの理念を把握していたのだ——その数年後にかれはこのイエーナで自分の考えを著述化したのである」と。

フィヒテは1794年5月にイエーナ大学に就任した。同じ年の7月20日、

イエーナの自然科学研究会でゲーテと、その当時イエーナ大学教授だった詩人シラーが初めて出会い、以後シラーの死まで生産性の高い友情を結んだ。またこの年10月、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトはシラーを慕ってイエーナに移住した。12月初めには滞在中のヘルダーリンはここで『ヒュペーリオン断片』を発表した。1974年の記念すべき年（チオルコフスキーは「イエーナの奇蹟の年」と呼んだ）に始まるイエーナの1790年代は、小さなこの大学町を一躍ドイツの最高の学術・文化の発信基地たらしめた。この1790年代のイエーナで、のちに近代的大学のモデルとなるベルリン大学の理念構想の基礎が生み出され、のちにイエーナ・ブルシェンシャフトとして誕生する学生改革案が編み出された。19世紀に入ってから実現する大学史・学生史の大きな転換は、実に1790年代のイエーナに胚胎したのである。ベルリン大学の創設の起因にはフランス軍による敗戦の屈辱があったが、ブルシェンシャフトの創設の起因には敗戦の屈辱に加えて、対仏解放戦争での大勝利という戦争体験が必要であった。実際、解放戦争時のリュツォー義勇軍での戦争体験の試煉なしには、ヤーン構想に基づくブルシェンシャフトの成立も、ましてや黒・赤・金の旗印が国民の意識に上ってくることはなかったであろう。

6

1812年末にヤーンはプロイセン政府に向けてドイツ義勇軍（Deutsche Freischar）の編成を求めて働きかけ、自ら大学生に募兵のキャンペーンを行なった。1813年2月18日、プロイセン政令によって義勇軍の設置が認められた。それより前の2月3日の「外国人」、つまり非プロイセン人をプロイセン軍に加入させるという例外規定に応じて、2月9日に退役陸軍少佐リュツォー（Lützow, Adolf Freiherr von, 1782-1834）、他二名の退役士官は、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世に義勇軍編成の申請書を提

出した。対仏戦争を控えた緊急事態のためか、意外にも早く義勇軍編成が許可され、その最高指揮官の名に因んで「リュツォー義勇軍」(Lützowsches Freikorps)と呼ばれた。ただしその際、「黒い軍服」を着用すべしという付帯条件がつけられた。これは在庫の古着の軍服と市民の私服を真黒に染め直して使用するという応急措置によるものであった。

こうしてリュツォー義勇軍の制服は黒一色に統一された。歩兵、狙撃騎兵中隊、砲兵の制服は、黄色のボタンが二列に並んだ長い黒地のリテヅカ(折り襟つきの上衣)、カラーと襟と袖の折り返しと肩章は全く同様黒地で、それらに赤い縁取りががついていた。黒いズボンには赤い飾り縁ががついていた。軍帽は真鍮製の留め金のついたチャコ(筒形の軍帽)だった。従軍学徒兵の一部には、のちにイエーナ・ブルシェンシャフターの風俗ともなった古ドイツ風の大黒頭巾形の黒いベレーをかぶる者もいた(ケルスティングの絵がこれを示している)。軽騎兵・槍騎兵中隊は赤の縁取りのない黒いドルマン(ハンガリー軽騎兵の短い上衣)を着用した。ヤーンはフリーゼンとトップをきって義勇軍に入隊したが、この黒づくめの制服について許嫁あての手紙でこう書いている。「頭のとっぺんから足元まで真黒で、目立たない赤の縁飾りと折り返しががついているだけです」。ナポレオンは義勇軍兵士たちを「黒い山賊ども」(brigands noirs)と呼んだという。ともあれ、正規軍ではなく補助部隊としての役割を与えられた急ごしらえの義勇軍として、総じて装備は「まことに不統一で、多くのばあい貧弱でさえあった」(1813年6月6日前線報告)らしい。黒と赤がリュツォー義勇軍の特徴を示す色であったことがよくわかる。だがこの黒・赤基調の軍服が当時の若者にどれほどリュツォー義勇軍への憧憬をつのらせ、参戦意欲をかき立てたかは、義勇軍に従軍して早々に戦死した熱狂的な愛国詩人ケルナー(Körner, Karl Theodor)や、同じ義勇軍兵士であった作家イマーマン(Immermann, Karl Leberecht)の一文からその一端がほの見える。

黒衣の狙撃兵の歌

Th. ケルナー

今なおわれわれは黒い軍服を着たまま、
亡くなった勇士を悼む。
だがこの赤が何を意味するのかを自問し給え。
これはフランケン人の血を意味するのだ。

また作家イーマンはこう書いた。「ドイツ人の生命のすべての色を再び
花咲かせようとの合図に、リュツォー軍兵士は地味な黒衣を着たのだ」と。

祖国の危難に際会して国難に殉じようという若者らしいロマンチックな悲
壮感というか、義勇軍を象徴化する黒・赤軍服のロマン化というか、ともか
くも若々しい情熱がここに見られる。アルント (Arndt, Ernst Moritz), シ
ェンケンドルフ (Schenkendorf, Max von) などの愛国的叙情詩人や、イエー
ナ大学歴史学教授ルーデン (Luden, Heinrich) の愛国的講義などによって
煽り立てられるように参戦した当時の若者たちの姿をここに見ることができる。
自身リュツォー義勇軍に従軍した画家ケルスティング (Kersting, Ge-
org Friedrich) の絵画「前哨勤務のテオドア・ケルナーとフリーゼンとハルト
トマン」(1815年作, ベルリン・シャルロッテンブルクのノイエ・ナチオ
ナル・ガレリー所蔵) は、深い森の大樹の下で、黒・赤・金の制服に身を
包んだ三名のリュツォー義勇軍兵士の歩哨勤務中の姿を描いている(右側に
銃を構えて立っているフリーゼン, 左手の大樹にもたれて腰を下ろしている
ケルナー, その手前で寝そべっているハルトマン——いずれも大黒頭巾風の
黒いベレー帽をかぶっているのに注意——)。またリュツォー義勇軍の黒い
軍服を着込んで出陣するイエーナ大学生の姿を、今なおイエーナ大学本館講
堂の舞台に掲げられた大画面に見ることができる(スイスの画家ホードラー
Ferdinand Hodler の1909年作)。

7

「リュツォー義勇軍は軍旗をもたなかった」とヴェンツケは言う。なるほどフォン・リュツォーは現役少佐に復帰して一部隊の指揮官に帰り咲いたとは言っても、正規軍ではなかったために、優に連隊規模を超える兵力数（一時は歩兵2,900，騎兵600，砲兵120名を数えたという）であったにもかかわらず、国王からの連隊旗親授はなかっただろう。この意味でならヴェンツケの発言は正しい。だがカウプの詳細な調査によると、1815年3月25日にリュツォー義勇軍が正規軍の歩兵第25連隊に新編成される以前の1814年1月から1815年1月にかけて、マスケット銃兵大隊に二度、そして火打ち石銃兵大隊に軍旗が授与されたという。してみると論功行賞として、正規軍としての新編成前のリュツォー義勇軍の二個大隊に、合わせて三つの軍旗が授与されたことになり、連隊旗については別として、義勇軍が軍旗をもたなかったというヴェンツケの所論は怪しくなる。しかし1815年後の新編成の連隊には当然ながら連隊旗が授与されたであろう。だがこれらの軍旗に黒・赤・金を少しでも連想させるものはなかっただろう（槍騎兵の一部が黒・白と並んで黒・赤の小旗を槍の柄につけた姿をカウプが文中に挿入したヘムスバッハの絵を通して見ることができる）。黒・赤・金が軍服には許されるとしても、プロイセン軍の旗印にまで用いられることにはプロイセン軍部は抵抗を示したであろう。プロイセン国王が黒・赤を基調とする軍旗に拒否反応を示した事実をわれわれは知っている。1813年の義勇軍の発足間もないころ、ベルリンの婦人会がリュツォー義勇軍に「金の房のついた赤と黒の絹糸で作られ『神とともに祖国のために』という銘文を金糸で刺繍をした旗」を贈った。ところが国王はこれを受取るのを拒否した。黒・赤・金の配色が国王の気に入らなかったらしいのだ。1813年4月8日、国王はプレスラウからベルリンの申請人である枢密顧問官ツォー・ドーナ＝ヴントラーケンにこう書き

送った。「愛国的な贈り物のうちでリュツォー義勇軍に送り届けられた軍旗を申請通り義勇軍に授与することには予は疑念を抱かざるをえない。新たに編成された部分的にすでに戦場に赴いた諸大隊と他の部隊のいずれにも予は軍旗を承認しなかった。それ以外にも、上述の旗の形式は、余の与える旗の形式とは非常に相違する」と。

一説によると、ヤーンは黒・赤・金を古いドイツ帝国の色と思い込んで、これをリュツォー義勇軍の旗印に提案したことがあったという。更にヤーンは1848年の演説で「不運な農民戦争以来、行方不明になってしまったのちにわたしが解放戦争ではやらせたドイツ色〔黒・赤・金〕をわたしは今なおもち続けている」と語った。してみるとヤーンは、旧帝国色としての黒・赤・金という幻想と、農民戦争で黒・赤・金に初めて言及した非運の帝国騎士フロリアン・ガイヤーの伝説への回想を抱き続けていて⁴⁾、そこで黒・赤・金旗を新設の（そして自ら参加する）義勇軍の旗印に（ベルリンの婦人会に働きかけたかどうかは不明だが）勧めたのかもしれない。ともあれ1810年代のロマン主義文学に特有の中世回顧的な思想傾向からしても、ヤーンとブルシェンシャフターの愛好した古ドイツ風 (altdeutsch) の服装（裳の長い黒い上着、長髪と大黒頭巾風の黒いベレー帽など）からしても、古い幻想を何らかの形で現実化しようという動きはあっただろう。

ともあれプロイセン軍では制服以外の黒・赤・金は御法度だったのだ。国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世は黒・赤・金を嫌ったように、ヤーンとその後のブルシェンシャフトを憎悪した。黒・赤・金の軍服を着てプロイセンのためではなく祖国のために戦うと称する学生たちや、愛国的詩人たちが統一国家の形成と市民的自由の権利の要求を黒・赤・金でシンボライズしようとする姿勢を嫌ったにちがいないのだ。

フリードリヒ・ヴィルヘルム三世は、黒・赤・金が王権と領邦体制の維持にとって危険を意味することを、その後にビスマルクが述べた「黒・赤・金は反乱とバリケードの色だ」(1850年4月15日のエアフルトの議会での演説)

を先取りしていたかもしれないし、カイザー・ヴィルヘルム二世（ボン大学のコア・ボルツシアのOB）が徹底的にブルシェンシャフトを憎んだ事実を予感していたにちがいない。でなければイエーナ・ブルシェンシャフターの一人ザント（Sand, Carl Ludwig）のコツェプー暗殺事件に続いて起こった「煽動者狩り」（Demagogenverfolgung）で、プロイセン政府が各大学のブルシェンシャフターを取締まり、ヤーンを始めとするかられの先導者たちをああまで手厳しく追いつめることもなかったであろうと思えるからだ。

8

結局、リュツォー義勇軍はいかなる意味でも黒・赤・金三色を暗示させる軍旗をもたなかった（ベルリン婦人会寄贈の旗は遂に日の目を見ることはなかった）。しかし義勇軍兵士として戦い、ブルシェンシャフトの結成に主導的な役割を果たした学生たちにしてみれば、かられが着用して戦った黒・赤を基調とする記念すべき軍服の色を新発足の学生団体の旗印と制服に選んだとしても奇異ではなかったろう。イエーナ・ブルシェンシャフト創設の際に採択された憲章（Verfassungsurkunde der Jenaischen Burschenschaft vom 12. Juni 1815）は、旗印と制服の色をこう規定する。

「若々しい喜びにはつねに人生の厳しさも考慮されねばならないことを銘記して、黒と赤をわれらが旗の色と決定した」と。それに続いて服装を規定する文が加わる。「われらは礼装用に赤いピロードの折返しが付いた黒い軍服（Waffenrock）を選んだ。折返しには金の樅の葉を飾り付けてもよろしい。下衣は長い黒ズボンである……。祝祭のパレードに用いられる飾り帯は金を織りまぜた黒と赤である……」。

リュツォー義勇軍の元兵士でブルシェンシャフトの創設に深く関与したイエーナ大学生の大部分は、ランツマンシャフト・ヴァンダリアの脱会者であることから、コア＝ランツマンシャフト系の論者は黒・赤・金のヴァンダ

リアの礼服の色がイエーナ・プルシェンシャフト色に決定的な影響を与えたと(既述したように)結論するが、しかし元義勇軍兵士で元ヴァンダリア所属のイエーナ・プルシェンシャフトの創設者たちの発言は、いかにかれらがリュツォー軍の制服色への愛着を強くもっていたかを証言しているとともに、義勇軍の軍服色が決定的役割を果たしたかを示してくれる。

1858年のイエーナ大学創設300年記念の際に、リーマン (Riemann, Heinrich Herrmann) はこう語った。「プルシェンシャフトはその根源に忠実にリュツォー軍の色、すなわち黒・赤と金の縁取りを身に着けた」と。同じ機会にホルン (Horn, F) と、そして1865年のドイツ・プルシェンシャフト創立50周年記念の際に、シャイトラー (Scheidler, K. J. K) の二人は、そろって「イエーナのわれわれはリュツォー軍の色を選んだ」と語った。そしてこの黒・赤・金が何を意味したかを、イエーナ大学創立300年記念祭でホルンはこう述べた。「黒は異国人支配のあいだ全ドイツの上におおいかぶさっていた夜の象徴だ、金は獲得された自由の朝やけの象徴だ、赤は自由を闘い取るのに流した心臓の血の象徴なのだ」と。

かれらと同じくウーア・プルシェンシャフトの結成に参加した学生たち、例えば既述デュレやカイル兄弟 (Keil, Richard/Robert) も、基本的に上述の三名の発言を確認している。黒・赤・金の原型はリュツォー軍の軍旗にではなく、その制服の色にあったことがこれではっきり確証できる。

リュツォー軍は「金の刺繍をした黒・赤の軍旗を携行した」というトライチュケの『19世紀ドイツ史』第2巻の記述はこれで間違いであったことがわかる。もともと既述の通り、リュツォー義勇軍に黒・赤・金三色を匂わせる軍旗を持ち込む余地は、プロイセン王麾下の軍隊にあってはまったくなかったのだから。

イエーナ・プルシェンシャフト結成当初のプルシェンシャフト旗は、金房の縁取りに囲まれ、上半分が赤、下半分が黒で、飾りつけはなかった。この旗は所属団体の存在を誇示するだけの旗印としては機能したであろうが、と

りわけ一般大衆の目に触れて何らかの政治的覚醒を促すに至るほどの機会には恵まれなかった。そのためには第二の旗の出現を俟たねばならなかった。

新しいブルシェンシャフト旗は、イエーナ在住の婦人・少女の会の製作によるもので、1816年3月31日、パリ占領第二年記念日にイエーナ市内のアイヒ・プラッツでの祝典場でイエーナ・ブルシェンシャフトに手渡された⁵⁾。新ブルシェンシャフト旗は、上から下に赤・黒・赤に三等分され、中央の黒地に斜めに金色の樅の葉が刺繍され、下段の花地の下の部分に金糸のフラクトゥーア（旧ドイツ文字）で「1816年3月31日、イエーナ婦人・少女会」と縫取りがしてあった。旗竿の先端の三角錐状の飾りつけには、1816年3月18日以降に採択された新しい標語「名誉・自由・祖国」を表わす文字の頭文字 E・F・V（= Ehre, Freiheit, Vaterland）が刻み込まれていた。新ブルシェンシャフト旗の引き渡し式に列席した憲章の連署人の一人であるネットー（Netto, Heinrich）は祝典詩を献上した。

金で縁取りした赤と黒、
 この色は深い聖なる意味を表わす。
 若者は若若しい喜びから
 人生の厳しさを決して分け隔るべきではない。
 金の縁取りが旗をしっかりと巻きつけていたように、
 若者は神と祖国に義務を負うべし。

9

1817年10月18/19日に、この旗はヴァルトブルク祭に持ち運ばれ、各領邦から集まったブルシェンシャフターと地元の住民の目の前にその姿を現わし、いわば聖別を受けた。宗教改革三百年祭とライプチヒの大勝利の四周年を祝賀するイエーナ・ブルシェンシャフト主導のこの式典に、イエーナ大学

の四教授フリース (Fries, Jakob Friedrich), キーザー (Kieser, Dietrich Georg), オーケン (Oken, Lorenz), シュヴァイツァー (Schweizer, Christian Wilhelm) は出席した。だが、ブルシェンシャフトの生みの親とも育ての親とも言うべきヤーンと、その愛国的叙情詩と史学講義で祖国の統一と自由を求める愛国的熱情を学生の間に巻き起こした詩人アルントとイエーナの歴史家ルーデン (Luden, Heinrich), この主賓三名の姿は——なぜ分らぬが——なかった。

祝典第一夜のアイゼナハ近郊ヴァルテンベルクでの焚書事件のような (1933年5月10日のナチ学生同盟 NSDStB の同種の事件の先駆とも呼ばれかねない) 不祥事件のあと、ブルシェンシャフト運動は徒に官憲の警戒を事更に強化することになり、黒・赤・金が出る幕は消えてしまった。カールスバートの決議 (1819年9月) 以降、逮捕拘禁、尋問、退学放校、公職追放など、いわゆる容赦のない煽動者狩りが始まったが、しかしながらヴァルトブルクに掲げられた黒・赤・金のブルシェンシャフト旗は、統一と自由を求める思想のシンボルとして国民の意識から消えることなく残った。1832年5月27日のハンバッハ祭 (西ドイツ初代大統領テオドア・ホイスは「近代ドイツの最初の政治的大衆集会」と呼んだ) で初めて現在我々が見ると同じ上から等間隔の黒・赤・金三色旗が登場した。三万人以上も集まったと言われるこの陽気な大集会で打ち振られた黒・赤・金旗のうちには、赤地の上に「ドイツの再生を」 „Deutschlands Wiedergeburt“ と銘記した旗もあった。ハンバッハの古城マクスブルクの塔頂には巨大な黒・赤・金旗が遠くからでも見ることができた。ジーベンプファイファー (Siebenpfeiffer, P. J.) はこの日に捧げる祝典詩で黒・赤・金が統一ドイツの国旗 Nationalfahne たるべしと唱えた。ともかくもこのハンバッハ祭で、本格的な黒・赤・金三色旗が登場することでもって、明らかに黒・赤・金があるべきドイツ色 (Deutsche Farben) であり、ドイツにおける統一運動と市民的自由を求める国民運動のシンボルとしての市民権をえたといつてよい。以後、48年革

命を経て兩次大戦を経た今日に至るまでの黒・赤・金の歩みについては触れる要はない。ヴァルトブルクに翻ったブルシェンシャフト旗の現実的効果がいかに国民的普遍性をもっていたかを知るだけでよからう。

10

祖国の統一と自由を求めてブルシェンシャフトの設立に結集した学生たちが進んで参加したリュツォー義勇軍は、既に言及した通り、正規軍ではなく、臨時編成の補助部隊であった。そしてその軍事的意義は、軍事史関係書が教えてくれるように乏しかった⁶⁾。その制服の色から「黒衣団」と呼ばれたこの部隊は、愛国的な若い詩人・作家や大学生・ギムナジウム上級生、その他脱走兵と大勢の職人たち、と職種も年齢もまちまちだった。その意味では将校と兵とが階層的に峻別されている正規軍と違って、義勇軍では兵身分に階層差がはっきり目立たざるをえなかった。詩人ケルナーが所属する騎兵中隊は1813年6月17日にキッツェン附近の戦闘で全滅を喫し（負傷したケルナーは間もなく戦死）たし、義勇軍は北方面に投入されたあとに正規軍に新編成されて解体されてしまった。特筆すべき戦果はなかったし、また学生兵士にランゲマルク神話に似た美談も生まれなかった。ただ従軍学生にしてみれば、職種も階層も教養度も異なる他邦の若者たちとともに戦塵を浴び、またヤーン大隊長殿の熱っぽく語る全国ブルシェンシャフト構想に耳を傾けたり、将来のあるべきドイツ像について語り合った機会は、志願兵同士の強い連帯感とともに祖国のために死を怖れぬ気概を強化する貴重な前線体験であったろう。黒・赤・金の同じ軍服を着て、敵前における死の恐怖や、生命の躍動感と高揚感、友の死を悼む悲しみと敵愾心など、おそらく死を前にした戦場でのみ体験しうるありとあらゆる人間感情をかれらは共に味到したであろう。義勇軍に参加した学生たちは戦場体験で得た強い連帯感と祖国の再生を抱いて復員したのである。ヴァルトブルク城に翻ったブルシェンシャフ

ト旗 (赤・黒・赤の真中に金糸の樞の刺繍と金房) は、黒・赤・金の制服を身に包んで戦った学生戦士たちの未来への熱い想いが込められていたのだ。テオドア・ホイスは基本法制定に当り、国旗の色を選ぶに際して、はっきりと132年前のブルシェンシャフト旗を引き合いに出して、ブルシェンシャフトが19世紀のドイツ統一と自由を求める運動で最初の先導的役割を果たしたことを認めた。

註

- 1) 「煽動者狩り」(1819), とくに48年革命以降, 最初期のイエーナ・ブルシェンシャフトが多分もっていた学生改革意欲と反体制的な政治的革新性は急速に冷えて、ドイツ・ブルシェンシャフトは血闘と酒宴に明け暮れる親睦団体に変貌した。ニーチェは1864-65年にボン大学の Burschenschaft Franconia に入団したが、わずか1年 (Fux と Brandfuchs として) で退団した。この間のニーチェのブルシェンシャフト・フランコニアの体験記録は、ブルシェンシャフト史の貴重な証言である。西尾幹二『ニーチェ・第一部』(1977) 252-303頁参照。
- 2) 各地各大学のユーア系学生団体の統括的な連盟組織 (Dachverband) である KSCV と、ブルシェンシャフト系学生諸団体を傘下に収める上部機関 Deutsche Burschenschaft (DB) は、ともに決闘規約 (Bestimmungsmensur) と独自のカラー (Couleur) を有し (schlagend, farbentragend), プロテスタント系である点で共通するが、その歴史的成立と気風の違いのせいで、両者の関係は決して友好的ではない。この古い伝統を有する有力二学生団体連合と、決闘規約をもたない (nichtschiessend) カトリック系二学生団体連盟 Cartellverband katholischer deutscher Studentenvereinigungen (CV) と Kartellverband katholischer deutscher Studentenvereine (KV) ——前者は Couleur を有し、後者はもたない (nichtfarbentragend) ——は、数多くの学生諸団体のなかで、最有力の権勢を誇っている。これらは政財官などあらゆる分野での有力な人材供給源であり、これらに属する学生たちの在学時の慣行 (Brauch und Sitte) は、独特の „akademische Subkultur“, ないし「隠れカリキュラム」(Das geheime Curriculum) として、我が国の小教諭銘柄大学の付加価値をも凌ぐ。
- 3) Jenaer Burschenschaft の成立事情と Ur-Burschenschaft の発展過程, Wartburgfest から Karlsbader Beschlüsse までの一連の歴史的推移 (1811-19) については以下を参照。Asmus (1995), Haupt (1910/66), Huber (S. 696-753), Steiger (1991), Wentzcke (1919/65), その他 Elms (S. 16-65), Heiter (S. 14-53), Schröder (in Asmus [1992]) など。邦語文献は、もっぱら Wentzcke に則って書かれた村岡哲『近代ドイツ精神と歴史』(1981) 所収の第6・7・8論文のみ。

- 4) 帝国騎士 (Reichsritter) Florian Geyer (1490ごろ-1525) は、1525年、内面的な確信に促されて農民蜂起に荷担し、農民戦争指導者として戦った。伝説によれば、ガイヤーはこう語ったという。「我々〔農民〕の悲しみが夜のように黒く、我々の怒りが血のように赤くなるまでに、貴族と坊主どもは我々の汗でもって金を鑄造したのだ。さあ諸君、やつらの屋根に赤いおんどりをのっけてやれ！」(「赤いオンドリを屋根にのせる」は「家に放火する」の意)。

ここから、フロリアン・ガイヤーが黒・赤・金をシンボル用語として用いた最初の人物という伝説が生まれた。

- 5) 1815/16年のイエーナ・ブルシェンシャフト旗は、イエーナのブルシェンシャフト・アルミニアの所有で、現在マインツのブルクケラーに所蔵されている。1817年10月にヴァルトブルクに運ばれたイエーナ・ブルシェンシャフトの第二の旗は、現在イエーナ市博物館に所蔵され、そのコピーはヴァルトブルク城の大広間 (Festsaal) の正面向って左手の天井近くに掲げられている。
- 6) Lützower Freikorps は、プロイセン軍のなかでの軍事的価値は乏しかったといわれるが、しかしその社会的側面は評価されねばなるまい。第一には、志願兵の熱烈な愛国心が一般徴募兵を刺激して正規軍の士気を高め、戦意昂揚の実を挙げて解放戦争勝利の原動力のひとつとなったこと。第二は、リュツォー軍は、国民 Volk と軍隊 Armee とを親密に結び付けようとしたシャルンホルスト (Scharnhorst, G. J. D. von) と、兵士による将校の選挙を唱えて、民兵 Miliz を優先して常備軍 (stehendes Heer) を廃してもよいとさえ主張したグナイゼナウ (Gneisenau, A. G. N. von)、この二人のプロイセン軍制改革者の考え方を吸収して、市民社会と常備軍との仲介的な役割を果たしたことである。

主要参考文献

- Asmus, Helmut: Das Wartburgfest. Studentische Reformbewegungen 1770-1819. Magdeburg 1995.
- ders. (Hg.): Studentische Burschenschaften und bürgerliche Umwälzung. Zum 175. Jahrestag des Wartburgfestes. Berlin 1992.
- Düding, Dieter: Organisierter gesellschaftlicher Nationalismus in Deutschland (1808-1847). Bedeutung und Funktion der Turner- und Sängervereine für die deutsche Nationalbewegung. München 1984.
- ders.: Friedrich Ludwig Jahn—Begründer der deutschen Nationalbewegung? Die frühe deutsche Turnbewegung (1811-1819) und die Entstehung eines organisierten gesellschaftlichen Nationalismus in Deutschland. In: Stadion. Zeitschrift für Geschichte des Sports und der Körperkultur, IV/1978, S. 83-120.
- ders. (Hg.): Öffentliche Festkultur. Politische Feste in Deutschland von der Aufklärung bis zum Ersten Weltkrieg. Hamburg 1988.
- Elm, Ludwig, u. a. (Hg.): Füxe, Burschen, Alte Herren. Studentische Korporationen von Wartburgfest bis heute. 2. Aufl. Köln 1992, S. 16-65.

- Guben, Berndt: Schwarz, Rot und Gold. Biographie einer Fahne. Frankfurt/M 1991.
- Hagen, Hans Heinrich: Friedrich Ludwig Jahns Anteil bei der Gründung der Deutschen Burschenschaft, In: **EuJ.** Bd. 27. 1982.
- Handbuch zur deutschen Militärgeschichte (in 5 Bdn.u. Regis.), hg. vom Militärgeschichtlichen Forschungsamt. Bd. 5. München 1979.
- Hartwig, Wolfgang: Zivilisierung und Politisierung. Die studentische Reformbewegung 1750–1818, In: **DuQ.** Bd. 14. 1992, S. 31–60.
- Haupt, Herman: Die Jenaische Burschenschaft von der Zeit ihrer Gründung bis zum Wartburgfeste. Ihre Verfassungsentwicklung und ihre inneren Kämpfe. In: **QuD** Bd. 1, 1910/1966, S. 18–113.
- Heiter, Dietrich u. a. (Hg.): Blut und Paukboden. Eine Geschichte der Burschenschaften. Frankfurt/M. 1997, S. 14–53.
- Helfer, Christian: Köseener Brauch und Sitte. Ein corpsstudentisches Wörterbuch. Saarbrücken 2. Aufl. 1991.
- Heydemann, Günther: Napoleonische Fremdherrschaft, Befreiungskriege und Anfänge der deutschen Burschenschaft bis 1818 im Urteil der Geschichtswissenschaft der DDR. in: **DuQ.** Bd. 10. 1978, S. 7–104.
- Huber, E. R.: Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789, Bd. 1, Stuttgart (Nachdr. d. 2. Aufl.) 1975, S. 696–753.
- Jahn, Friedrich Ludwig/Eiselen, Ernst: Die deutsche Turnkunst, hrsg. v. der Deutschen Hochschule für Körperkultur Leipzig. Berlin (Ost) 1960.
- Jahn, Günther: Friedrich Ludwig Jahn. Volkserzieher und Vorkämpfer für Deutschlands Einigung 1778–1852. Göttingen/Zürich 1992.
- Kater, Herbert: Entstehung der Farben Schwarz-Rot-Gold. In: **KB.** 2/1986. S. 7–20.
ders.: Die Herkunft der Farben „Schwarz-Rot-Gold“. **EuJ.** 34/1989, S. 107–116.
- Kaupp, Peter: Von den Farben der Jenaischen Burschenschaft zu den deutschen Farben. Ein Beitrag zur Frühgeschichte der Entstehung von Schwarz-Rot-Gold. In: **EuJ.** 34/1989, S. 77–106.
- Nipperdey, Thomas: Deutsche Geschichte 1800–1866. Bürgerwelt und starker Staat. München (6. Aufl.) 1993.
- Paschke, Robert: Studentenhistorisches Lexikon. Köln 1999.
- Schurdel, H. D.: Deutsche Nationalflaggen(II). In: **KB.** 1/1988, S. 3–9.
- Schröder, Willy: Der Anteil F. L. Jahns und der Turner am Volkswiderstand gegen die französische Fremdherrschaft. In: Das Jahr 1813. Studien zur Geschichte und Wirkung der Befreiungskriege. Hg. v. Fritz Straube, 2. Aufl. Berlin 1963, S. 161–176.
ders.: Die Gründung der Jenaer Burschenschaft, das Wartburgfest und die Turnbewegung 1815–1819. In: Asmus (1992), S. 70–79.
- Steiger, Günter: „Ich würde doch nach Jena gehn.“ Geschichte und Geschichten, Bilder, Denkmale und Dokumente aus vier Jahrhunderten Universität Jena. Weimar. 4. Aufl. 1989.

ders.: Urburschenschaft und Wartburgfest. Aufbruch nach Deutschland. Leipzig 2. Aufl. 1991.

Treitschke, Heinrich von: Deutsche Geschichte im Neunzehnten Jahrhundert. Leipzig 2. Tl. 1882, 3. Tl. 1885 (4. Aufl. 1896).

Die Verfassungsurkunde der Jenaischen Burschenschaft vom 12. Juni 1815, hrsg. v. Herman Haupt. In: **QuD**. Bd 1. S. 114–161.

Wentzcke, Paul: Geschichte der deutschen Burschenschaft. 1. Bd. Vor- und Frühzeit. In: **QuD**. Bd. 6. (1919/1965) S. 1–399.

ders.: Die deutschen Farben. Ihre Entwicklung und Deutung sowie ihre Stellung in der deutschen Geschichte. In: **QuD**. Bd. 9 (1955).

石川澄雄『シュタインと市民社会—プロイセン改革小史』お茶の水書房, 1972.

スミス, ホイットニー『世界旗章大図鑑』平凡社, 1977.

レオンハート, ヴァルター (須本訳)『西洋紋章大図鑑』美術出版社, 1979.

Abkürzungen

DuQ = Darstellungen und Quellen zur Geschichte der deutschen Einheitsbewegung in 19. und 20. Jahrhundert. Hg. v. Paul Wentzcke u. a., Heidelberg 1957ff.

QuD = Quellen und Darstellungen zur Geschichte der Burschenschaft und der deutschen Einheitsbewegung. Hg. v. Herman Haupt u. a. Heidelberg 1910ff.

EuJ = Einst und Jetzt. Jahrbuch des Vereins für corpsstudentische Geschichtsforschung. 1956ff.

KB = Kleeblatt. Zeitschrift für Heraldik und verwandte Wissenschaften.

(すぎうら・ただお 商学部名誉教授)